2017年11月16日＜木＞　　於　国立社会保障・人口問題研究所

在日華僑華人からみる日本・中国・東アジア

——日中社会保障の排除と包摂——

明治大学　鍾家新

一　なぜ在日華僑華人問題を研究するか

- A　在日華僑華人問題から日本・中国・東アジアを考える
- B　日中社会保障の問題を考える
- C　日本社会と中国社会の比較
- D　漂泊者としての自分への理解

二　在日華僑華人研究のきっかけ

2000年、ある華僑団体の年度総会への参加

・１　孫文の写真/国旗を掲げない/中国大陸・台湾の代表団

・２　台湾代表団長呉伯雄（国民党副主席）「客家本色」を歌った

中国代表団のサービス精神の不足

・３　これまでの「金持ち華僑」という「華僑像」との距離

・４「華僑社会」の格差、投影された日本社会と中国社会/将来の自分への理解

三　在日華僑華人研究への試み

在日華僑華人の先行研究が多い/独自性の困難

１　参与観察→華僑団体活動の参加

・A　新しい華僑組織・団体の創立に参加

・B　華僑雑誌の創刊・編集（会員費・広告費・寄付）

私が行った聴き取り調査の内容を掲載/自分が知りたい内容とのズレ

２　聴き取り調査

- 在日華僑華人への全体像にかんする聴き取り調査による体系的な研究がない。

- 聴き取り調査に基づいた単著という構想（聴き取り調査による発見の悦び）。

- 紹介者→高い価値をもつ事例を探す/聴き取り調査の困難、快諾と拒否。

四　老華僑華人と新華僑華人

- １　来日の方法：商売・親戚訪問・留学・日本人との結婚・亡命・密航など
- ２　職業：「三把刀」という職業（＜剪刀＞＝服仕立て・＜理髪刀＞＝理髪・＜菜刀＞＝料理）、サラリーマンなど多様化
- ３　居住地：横浜・神戸・長崎・函館・日本全国
- ４　結婚：中国系同士、日本人との結婚
- ５　子弟の教育：横浜中華学校など→自主的排除（中国にある日本人学校）
  中国大陸・台湾の学校・大学
  日本の普通の学校・大学（医学・その他）

＜在日老華僑＞とは1972日中国交正常化の前に日本に移住した中国系の人々と彼らの子孫を指す。

＜在日新華僑＞とは

＜在日新華僑＞とは1978年の「改革・開放」政策以降、留学などで来日し、現在日本で就職・生活をしている中国の国籍をもつ人々を指す。

＜新華僑＞は＜老華僑＞と異なり、日本と中国を半々で生活する人が多い。来日した年齢、性別、学歴、職業、家族構成などによって、＜在日新華僑＞の間に社会的地位の格差が生じている。

この格差は、＜在日新華僑＞の間の福祉格差を生み、日本の社会福祉制度の評価に影響を与えている。

五　在日華僑華人の福祉問題

１　日中社会保障の排除と包摂

A　老華僑華人
・・・・・・・・・・排除から包摂へ　/社会保障を前提としない人生

B　新華僑華人
・・・・・・・・・・排除・包摂の対象/社会保障を前提とする人生

1981年、「難民の地位に関する条約」への日本の批准/反射的利益
日中両国の社会保障制度の問題
一国加入/二重加入→国際移動への影響

- 日本で年金保険に加入したが、中国でも年金保険に加入している人もいる。日本と中国との間に「社会保障協定」が締結されていないため、二重加入になっている。

- 中国にいないため親の介護に翻弄されている。＜在日新華僑＞はかつて横浜・神戸・函館などで集団生活をしていた＜老華僑＞と異なり、日本全国で分散して生活している。60歳代に入った彼らは＜老華僑＞よりも孤独である。

→華僑の社会的孤立の問題
（中国残留孤児との比較）

- ＜老華僑＞たちは彼がいた時代では日本と中国との近代化の格差が大きかったため、日本を生活の基盤として選んだ。中国が遅れたため、日本で苦労した意味が高かった。

- これに対して、＜在日新華僑＞がおかれる時代が変わってきた。日本と中国との近代化の格差が依然として存在しているが、北京・上海など都市部との格差が縮小しつつある。＜在日新華僑＞の一部は生活の様態も変わりつつある。例えば、戦前から日本にきた＜老華僑＞と異なり、＜在日新華僑＞には、中国と日本の双方を生活基盤として、年間半々で仕事・生活する人が多くいる。

- 多くの＜新華僑＞が仕事をしている中国を中心に、＜在日新華僑＞に対して聴き取り調査を行った。

- ＜在日新華僑＞のなかで、20歳代の人もいれば、60歳代の人もいる。＜在日新華僑＞のなかでは福祉格差が存在している。一部の人々は日本人と同様に日本の年金保険・医療保険に加入し、恵まれている状況にある。

- これに対して、もう一部の人々は日本語を自由に使えず、入院・手術などのとき不安を感じている。また、来日当時、既に35歳を超えたため、国民年金に加入することができなかった人もいる。彼らは無年金者になっている。老後の生活は民宿の経営などで自力で送るしかない。

- 現代の福祉国家体制は国民国家を前提にして構築されてきたものである。しかし、近代化過程において、国民国家の枠で包括されきれない人々がいる。華僑たちはそういう存在の一例である。グローバル化のなかで、＜在日新華僑＞はますます国民国家の間に往来し生活している。

- 現在の日本の福祉国家体制と中国の社会保障体制は明らかに＜在日新華僑＞の移動を阻害している。中国と日本の間に移動しながら、生活する日本人も増えている。

- 中国の近代化の進みに伴い、日中両国における社会保障協定の締結は現実的な課題になっている。

２　在日華僑華人の老い・死

A　老華僑華人

a　親の老い・死……儒教（孝の文化）・承認・風水（＝死後の生/死の受容）

b　自分の老い・死

「帰葬」「回葬」……華僑組織・宗族（財力・相互扶助）

「落葉帰根」（老後を故郷に帰るという比喩・生死観・天・大地）

生前も死後も＜境界人＞

マルセス・モースの「贈与論」

→タルコット・パーソンズ　生＝神からの贈り物

死＝神への返礼

華僑にとって、故郷での死＝中国大地への返礼

B　新華僑華人

a　親の老い・死（故郷・国家の化身）

b　自分の老い・死

「帰葬」「回葬」の不可能……個人化された新華僑華人

華僑組織の衰退

宗族の衰退（3000年の中国の敗北）

日中間の格差の縮小

「落地生根」（老後を移住先で送るという比喩）

五　東アジア人の原初形態

１　移民の宿命→排除される/同化される/「第三の道」の可能性

２　アイデンティティ←日本と中国の格差

３　現代人の心象風景「自由・孤独」/「連帯・束縛」

４　東アジア連合の可能性

人的基盤＝東アジア人←「東アジア人」の教育

六　研究過程における苦悩・突破口・課題

１『日本型福祉国家の形成と「十五年戦争」』（ミネルヴァ書房、１９９８年 ）
『中国民衆の欲望のゆくえ』（新曜社、１９９９年）の後の空白期。

２　日中比較への転換/日中の学者が研究しにくい領域・視角

越境する集団である在日華僑華人・中国残留孤児

越境する植民地官僚・後藤新平

A『在日華僑華人の現代社会学――越境者たちのライフ・ヒストリー』
（ミネルヴァ書房、2017年）

B『社会凝集力の日中比較社会学――祖国・伝統・言語・権威』
（ミネルヴァ書房、2016年）

中国残留孤児の老い・死・孤独に関する研究

中国残留孤児/中国人養父母/中国の親戚/ボランティア・支援団体など
への聴き取り調査

４　研究の意味と価値

Ａ　国家のため/社会のため→権力・国家との一体化

Ｂ　自分のため→自己表現と自己探し

ご清聴ありがとうございました